様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７８３３

研究課題名（和文）古典派経済学形成期の宗教的思想基盤の解明－ラティテュディネリアニズムと自然法学

研究課題名（英文）The clarification of religious foundation in the formative period of the classical school of economics: latitudinarianism and natural jurisprudence

研究代表者
門　亜樹子（Akiko, Kado）

京都大学・経済学研究科・ジュニア・リサーチャー

研究者番号：２０７９１９１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ユグノーの法学者ジャン・バルベラック（Jean Barbeyrac, 1674－1744）と、彼がその説教を仏訳したラティテュディネリアンのジョン・ティロットスン（John Tillotson, 1630－94）が、スコットランド啓蒙に重要な影響を与えたことを示すことにある。本研究を通じて、両者のキリスト教的人間像の共通点を明らかにし、18世紀後半のスコットランドのコモンセンス哲学が両者の道徳思想を継承した可能性を指摘した。さらに、「人間精神の哲学」としての道徳哲学に着目し、スコットランドおよびフランス語圏の哲学者によるロック哲学の受容に関する相違点を明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、第一に、バルベラックとティロットスンの原典研究というこれまでにない視点から、古典派経済学形成にキリスト教思想が与えた影響について検討した点にある。第二に、コモンセンス哲学をめぐるスコットランドとフランス語圏の知識人の知的交流に着目し、古代ギリシャ・ローマ哲学の系譜に基づく「人間精神の哲学」としての道徳哲学を検討した点にある。また、本研究成果の社会的意義として、現代社会の理論的・思想的枠組みを構築した西欧近代社会諸科学の源泉の解明に貢献することが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to show that the French Huguenot jurist Jean Barbeyrac (1674－1744) and John Tillotson (1630－94), a prominent latitudinarian, whose sermons were translated into French by Barbeyrac had an important effect on the Scottish Enlightenment. In the course of this research, it should have become clear that Barbeyrac and Tillotson had the Christian view of human being in common. Furthermore, my investigation indicated that their moral thought was succeeded to philosophy of common sense in the latter half of the eighteenth-century Scotland. Through the research above mentioned, the scope of this research was expanded into moral philosophy as ‘philosophy of human mind’. As a result, it was demonstrated that the Scottish and French philosophers differed in emphasis on John Locke’s philosophy.

研究分野：社会思想史

キーワード：バルベラック　ティロットスン　ラティテュディネリアニズム　自然法学　スコットランド啓蒙　コモンセンス哲学　道徳哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

スコットランド啓蒙において、大陸の近代自然法学とラティテュディネリアニズム（latitudinarianism：イングランド国教会内で穏健な立場を守り、理性を重視する思想傾向）は、重要な役割を果たしたと考えられている。スコットランド啓蒙知識人の代表としては、グラーズゴウ大学道徳哲学講座の歴代教授（カーマイクル、ハチスン、スミス、リード）が挙げられるが、そのなかで古典派経済学の祖アダム・スミス（Adam Smith, 1723－90）だけが近代自然法学を継承する際に、三義務論（神、他者、自己への義務）を採用せず、完全権のみから成る法学体系を構築した。これに対して、同講座のスミスの後任トマス・リード（Thomas Reid, 1710－96）はスミスの『道徳感情論』を「自愛心（利己心）の体系」だと批判した。このようなスミスの思想の特異性の理由について、自然法学体系とキリスト教思想という二つの思想的背景の観点から分析し解明する必要がある、という着想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、スコットランド啓蒙におけるアダム・スミスの道徳哲学体系（法学思想を含む）の特異性について、自然法学体系とキリスト教思想（とくにラティテュディネリアニズム）という二つの思想的背景の観点から分析し解明することである。

スコットランド啓蒙研究の分野では、近代自然法学が及ぼした影響に関して多くの研究が蓄積されているが、これらの先行研究においてバルベラックの重要性に言及しているものは数が少ない。例えば、Haakonssen(1996)は、大陸の近代自然法学者フーゴー・グロティウス、ザームエル・プーフェンドルフの著作のバルベラックによる仏訳版が、カーマイクルとハチスンに与えた重要性を指摘している。一方、バルベラックをメインに扱った単著の研究（Meylan 1937, Othmer 1970）やバルベラックのキリスト教思想を主題とする研究（Hochstrasser 1993、野沢 1984、野沢 2014）では、バルベラックとスコットランド啓蒙の思想的関連について分析はされていない。スコットランド啓蒙研究とバルベラック研究のいずれにおいても、ティロットスン『五十四説教集』（*Fifty-four Sermons and Discourses.* London, 1696）のバルベラックによる仏訳（部分訳）は俎上に載せられることがほとんどなく、同訳の重要性について十分に認識されているとは言い難い。ラティテュディネリアニズム研究においても、ティロットスンとスコットランド啓蒙の関わり（グラーズゴウ大学道徳哲学講座教授であり牧師でもあったリードがティロットスンの説教を愛読していたこと）の思想的意義は看過されている。

本研究は先行研究におけるいわば空白の領域を埋めるものである。近代自然法学とキリスト教思想（ラティテュディネリアニズム）の結節点としてのバルベラックに着目し、ラティテュディネリアニズムがスコットランド啓蒙思想の道徳哲学体系に及ぼした影響を分析することは、古典派経済学形成期における宗教的思想基盤の解明に貢献するものと考えられる。

３．研究の方法

本研究で使用した原典文献の入手方法に関して、リプリントと校訂版以外の版は Early English Books Online, Eighteenth Century Catalogue Online といったデータベースおよび Google Books を通じて入手した。各版の異同を確認するとともに、翻訳（英訳・仏訳）がある原典に関しては、原文と訳文を比較対照した。さらに、海外の図書館蔵書検索システム（COPAC, Catalogue collectif de France, Karlsruher Virtueller Katalog）を利用し、原典資料の書誌情報を調査した。なお、本研究で取り上げた思想家の国内外の研究動向を調査するにあたり、*Oxford Dictionary of National Biography* の他、CiNii, JSTOR, Google Scholar 等を利用し、二次文献の収集に努めた。

バルベラックの著作に関しては、彼が翻訳したプーフェンドルフ『自然法と万民法』仏訳版（1706 年）の訳注および「訳者序文」（邦題『道徳哲学史』）と『娯楽論』（1709 年）を主要な分析対象とした。ティロットスンの著作に関して、彼の死後出版された三種類の『著作集』（各々の初版は 1696 年、1710 年、1743－44 年に出版）に収録された説教の題名・説教年とそれぞれの『著作集』の重複を確認し、バルベラックと他の訳者による『説教集』の仏訳版と原典の対応関係を調査した。また、ティロットスンの説教で引用されている新約・旧約聖書の文章の出典（英訳・仏訳）の確認作業を行いつつ、「感覚の確実性」と信仰の論拠を主題とする説教を中心に、『著作集』原典および仏訳版を精読した。

スコットランド啓蒙知識人の道徳哲学体系におけるバルベラックとティロットスンの道徳思想の受容の実態を調査するために、アバディーン大学の関係者が会員の多くを占めた「アバディーン哲学協会」に所属したリード（1764 年にグラーズゴウ大学に転任）、ジェイムズ・ビーティ（James Beattie, 1735－1803）、ジョージ・キャンブル（George Campbell, 1719－96）のの以下の著作――リード『常識原理に基づく人間精神の研究』（1764 年：邦題『心の哲学』）と『実践倫理学講義』（講義ノート）、ビーティ『真理の本性と不変性――詭弁および懐疑論への反駁』（1770 年）と『道徳科学要綱』（1790－93 年）、キャンブル『奇跡論』（1762 年）と『レトリックの哲学』（1776 年）――を精読した。このうちビーティの『真理論』は当時のベストセラーであり、1778 年に『真理論』他数編が収録された論文集が出るまで初版以降ほぼ毎年版を重ねている。第二版（1771 年）と第六版（1777 年）では大きな変更が為され、他の版も細かな相違が見られる。このため、『真理論』の精読にあたり、それらの相違に特段の注意を払った。

18 世紀後半以降、ヒューム、スミス、リードをはじめとするスコットランド学派の多数の著

作が仏訳されている。当時出版された近代西欧哲学史の仏語・英語文献において、スコットランド学派の道徳哲学体系に対する仏語圏の知識人の反応と、これに対するスコットランド知識人側の応答に着目し、両者を分析の対象とした。特にジュネーヴの知識人ピエール・プレヴォ（Pierre Prévost, 1751－1839）がアダム・スミス『遺稿集』（哲学論文集）の仏訳版（1797 年）に記した「訳者序文」（『近代哲学三学派』）、エディンバラ大学道徳哲学教授ドゥーガルド・ステュアート（Dugald Stewart, 1753－1828）『近代西欧哲学史』（1815－21 年）の第 2 部第 7 章「カントと新ドイツ学派の他の形而上学者」、フランスの行政官兼哲学史家ジョゼフ＝マリ・ドゥ・ジェランド（Joseph-Marie de Gérando, 1772－1842）『哲学体系比較史――人知原理との関連性』第二部（第二版補訂版：1847 年）の第 4 巻第 24 章「スコットランド学派」を比較検討した。ジェランドの『哲学体系比較史』は、初版（全 3 巻）が 1804 年に出版され、第二版補訂版は古代から中世の哲学史を扱った第一部（全 4 巻）が 1822－23 年に出版された。同第二部「文芸復興から 18 世紀末までの近代哲学史」（全 4 巻）は、ジェランドの死後 1847 年に出版され、冒頭に息子ギュスターヴ・ドゥ・ジェランドの「緒言」が追加された。初版は 1500 ページを超え、第二版補訂版は第一部と第二部を合わせると 4000 ページ近い大著のため、各版の目次を訳出し、同書の構成および対象範囲の把握に努めた。

４．研究成果

本研究の主な成果として、図書 1 冊と翻訳 1 冊の出版、学会発表 1 回、同著および同訳の合評会における 3 回のリプライを挙げることができる。翻訳書は、本研究課題の開始時点（2017 年 4 月）では校正作業中で、同訳書の「訳者解説」を拙著に再録するにあたり、付録部分の点検と加筆修正を行った。拙著にて公表された本研究の成果は、以下の三点にまとめられる。

(1) ラティテュディネリアンのキリスト教的人間像の特徴を明確にするため、バルベラックとピエール・ニコル（Pierre Nicole, 1625－95）の自己評価論を比較検討した。ニコルの主著『道徳論集』（全 4 巻：1671－79 年）の一部をジョン・ロック（John Locke, 1630－1704）が英訳しており、ロックによる英訳版（トマス・ハンコックの編集版［1828 年］と J.S.ヨルトンが編集した対訳版［2000 年］）も参照した。バルベラックもニコルも傲慢を悪しきものとして非難し、傲慢を是正する手段を最終的に神に求める点で共通している。その一方で、ニコルが「へりくだらせる（humilier）最良の手段」を「自らの無力さを自分に認めさせること」とするのに対し、バルベラックは「キリスト教の謙遜（Humilité Chrétienne）」が「雅量と大度の純然たる原理によって抱かれる称賛すべき競争心や崇高な野心」と決して矛盾していないと主張した。このような相違が、両者のキリスト教的人間像の相違に起因することを示した。つまり、バルベラックはキリスト教的人間像として「使用と誤用が区別可能な理性的被造物」を想定しているのに対し、ニコルは正統派カルヴァン主義者に近い見解を有するジャンセニストであり、「人間本性の腐敗」を強調する伝統的なキリスト教的人間像（神の恩寵を待つしか魂の救済の手段を持たない無知無力な人間）を有していた。

(2) ラティテュディネリアニズムと自然法学の思想的関連性について、ティロットスンとバルベラックの思想を感覚・理性・信仰を中心とするキリスト教的人間像の観点から比較検討した。ティロットスンは人間精神の諸能力（感覚、理性）を「神からの賜物」と捉え，とくに感覚の確実性を強調する。バルベラックもまた、ティロットスンによる「感覚の確実性」に基づく実体変化批判を支持し、洗練可能な人間本性観に基づき、理性の光と信仰の光の一致を主張する。理性の役割を軽視する見解（懐疑論）に対し、バルベラックは人間の能力の不完全性を前提とした上で、人間は真理を誠実に愛する存在だと反論しているが、ティロットスンも、感覚は不可謬の確信を与えず、神聖な信仰は「疑いの余地のない確信」から構成されるとして、教皇不可謬説を批判した。人間精神の諸機能の不完全性を容認する点で、両者の見解が一致することを示した。

(3) バルベラックの「道徳科学」の定義とビーティの道徳哲学体系を比較し、バルベラックの「道徳科学」がビーティの学問区分における「倫理学」に相当することを提起した。また、ビーティの道徳哲学体系とリードの哲学および倫理学体系の主要な共通点として、ニューマトロジー（霊学）の重視とともに、倫理学に三義務論が含まれ、政治学に統治形態論が含まれている点を指摘した。ティロットスンの信仰の論拠の区分（感覚、経験、推論、証言）に関する議論が、アバディーン啓蒙を担った教会知識人の間で「明証性の理論」として展開されたことから、道徳哲学体系と（直観的原理としての「常識」に基づく）明証論の関係を分析した上で、（ヒュームの）懐疑論への批判内容の把握に努めた。ビーティの明証性に関する議論は、彼の道徳哲学体系の実践的部分である論理学の一部を構成し、同学派のキャンブルと同様に常識原理（直観的原理）に帰着する。ビーティの懐疑論批判とリードの「観念理論」批判はヒューム批判を目的としていた。ドゥーガルド・ステュアートと彼の文通相手のプレヴォの共通の課題の一つに、ヒュームの（外部世界の存在への）懐疑論の克服者としてのカントの評価があった。Levi Mortera (2012) によれば、ステュアートはカドワースとカントの類似を強調し、ロックにおける「反省の機能」を重視したとされる。これに対し、本研究はプレヴォがロック、コンディヤックの延長概念とカントの空間概念の類似を指摘し、ロックにおける「感覚の機能」を強調したことを示し、プレヴォとステュアートによるカント解釈とロック哲学の強調点に相違が見られることを明らかにした。さらに、ステュアート、プレヴォと交友関係にあったジェランドが、当時のフランス哲学界の趨勢を反映し、スピリチュアリスムとコンディヤック主義（感覚論）のいずれの立場を選ぶかという問題に直面しており、プレヴォのロック解釈が「感覚の機能」を強調する点で、ジェラン

ドよりもコンディヤック、デステュト・ドゥ・トラシに類似することを指摘した。ロック哲学における「感覚の哲学」と「反省の哲学」のいずれの側面を重視するかという問題は、哲学史における「経験の哲学」と「理性の哲学」の系譜に直結する。(3)の研究成果の一部は、本研究課題の期間内に行った学会発表に基づいている。

本研究課題の開始時点での最終的な研究テーマであったリードとスミスの自然法学体系の相違の実態および原因について、十分に考察するまでには至らなかった。ただ、バルベラックとティロットスンの道徳思想に共通するラティテュディネリアニズムに焦点を絞り、原典研究を進めてゆく中で、西欧の基礎学問である道徳哲学（moral philosophy）の基底を成す「人間精神の哲学」の重要性を看過すべきではないことに思い至り、研究の対象および範囲を 18 世紀後半のスコットランドにおけるコモンセンス哲学と、それをめぐるスコットランドと仏語圏の知識人の知的交流へと拡大した。これに伴い、西欧思想の二大潮流である古代ギリシャ・ローマ哲学とキリスト教思想の両方の系譜から、バルベラックとティロットスンの道徳思想を多角的に検討することが可能となった。積み残した上記の研究テーマについては、本研究成果により得られた知見に基づき、バルベラックとスコットランド啓蒙の主流派知識人（牧師）の敬神概念を比較検討した上で、改めて取り組みたいと考えている。また、バルベラック『娯楽論』の邦訳出版を目指し準備を進めており、キケロの義務論の 18 世紀の展開について、近代自然法学の三義務論との比較の観点から検討する予定である。

日本における（ヨーロッパ）思想史研究において、ヨーロッパの思想・学問の基礎にあるキリスト教思想は、関心を持たれることが少なく、等閑視されてきた。バルベラックの『道徳哲学史』で提示されているような古代ギリシャ・ローマの哲学に関する知識が、近代・現代を問わず欧米の思想家にとって「常識」であり、哲学とキリスト教との関係の理解が、ヨ―ロッパ思想史を理解するうえでも重要であることは、彼らの著作からも明らかである。現今の（ヨ―ロッパ）思想史研究において、これら二つの要素の関係を深刻にとらえる姿勢は未だ希薄のように思われる。本研究成果が、上記の思想史研究の現状に一石を投ずるものであることを願っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 門亜樹子
２．発表標題 ビーティとプレヴォの哲学史―バルベラック『道徳哲学史』との比較の観点から―
３．学会等名 日本イギリス哲学会関西部会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 門 亜樹子	４．発行年 2019年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 308
３．書名 啓発された自己愛―啓蒙主義とバルベラックの道徳思想	

１．著者名 バルベラック、門 亜樹子	４．発行年 2017年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 546
３．書名 道徳哲学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「ヒュームとスミス」セッション、世話人：篠原久、報告者：前田俊文、生越利昭、リプライ：門亜樹子、社会思想史学会第44回大会，甲南大学、2019年10月。

「合評会： 門亜樹子訳・J．バルベラック『道徳哲学史』京都大学学術出版会、2017年」　評者：野原慎司、リプライアー：門亜樹子、経済学史研究会第246回例会、関西学院大学、2018年12月。

「自由主義思想の射程」セッション、世話人：森岡邦泰、司会：田中秀夫、報告者：有江大介、森岡邦泰、リプライ：門亜樹子、社会思想史学会第43回大会，東京外国語大学、2018年10月。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考